

本学所蔵の往来物の研究（Ⅲ）*

梅村 佳代**

（教育学教室）

要旨：本学所蔵の往来物のうち訓育類6点、女子用往来物及び女子用教科書類3点、古往来2点、理学類及びその他の教科書類4点の合わせて15点を取り上げた。訓育類では実語教・童子教、女子用往来では世界婦女往来、古往来では庭訓往来、理学類及びその他の教科書類では塵劫記などをとりあげて各種類ごとの編集形態や内容の特徴を分析した。

キーワード：訓育類、女子用往来物、古往来

はじめに

本学が所蔵する往来物48点のうち33点については、既に拙稿「本学所蔵の往来物の研究（Ⅰ）」（『奈良教育大学教育研究所紀要』32号 1996年）及び「本学所蔵の往来物の研究（Ⅱ）」（同33号 1997年）において検討を加えてきた。本稿は前稿に引き続き、残る15点の往来物についての検討を行うものである。分類によれば訓育類6点（教訓類2点、合書類4点）、女子用往来物と女子用教科書類3点、古往来2点、理学類及びその他の教科書類4点で、併せて15点を取り上げ、これで旧蔵の本学所蔵の往来物の検討を完結する。（別表1参照）

（1）訓育類について

訓育類でとりあげる本学所蔵往来物は「童子往来万福宝蔵」（享保7年）、「新童子往来万代宝蔵」（文化4年）、「新童子手習鑑」（文政8年）、「懐宝童子往来」（天保13年）「謹身往来」（天保14年）、「世話字往来」（弘化年）の6点である。このうち前四冊の童子往来を岡村金太郎の分類では「合書類」としてしている。中世社会に作られた実語経・童子教を基に双方併せて編集されているものが多く、合書類としているものであるが、内容的な分類に重きを置いた石川謙・石川松太郎の分類に従い、訓育類に入れた。石川松太郎は訓育類を「児童への教戒の文言を中心に編まれた往来物往来物であって、江戸時代では熟語類・消息類などとならんで、種類も多く普及も遂げた往来分野」⁽¹⁾として数も多く類型も多岐に分かれ教訓的内容の往来物発刊は膨大であったとしている。編集方式や記事内容により、さらに実語経型・一般教訓型・躰方型・知育型・四民教訓型の五類型に分類されている。“実語経型”は「平安末期の作とされる『実語教』ならびに鎌倉時代の撰作と推測されている『童子教』の二教を始祖とし原型と

* A Study of Ouraimono preserved in Nara University of Education

** Kayo UMEMURA (Department of Pedagogy, Nara University of Education)

する一群の往来物」であり、本学所蔵の「童子往来万福宝蔵」「新童子往来万代宝蔵」「新童子手習鑑」「懷宝童子往来」がそれにあたる。また“一般教訓型”とは「詩歌・韻文・散文など、さまざまな形態を自由に用いながら庶民生活に必要な道徳ならびに生活心得を説いた往来物が数多く作られ、普及するようになった」ものを総称し、江戸時代になって普及した型としている。さらに小分類されてA今川状系、B六論衍義大意、Cさまざまの教訓について説いたもの、D特定の特目について説いたもの、に四小分類される。「Cさまざまの教訓について説いたもの」は「日常の生活や労働にかかわって大切なさまざまの教訓類をまとめて扱った往来物」とされ、さらに七類に分けられている。第一類は教訓にかかわる短歌・短句を集めたもの、第二類は『子供早学問』（文化13年）を始祖とし原型とした短句集、第三類は短歌・箴言・格言・諺などの形によって教訓一般を説いたもの、第四類は遺訓・遺戒・家訓などの形式をとって教訓一般を説いたもの、第五類は和漢混淆文で記し、吉田其幸著「謹身往来」（寛政二年開版）を始祖とし原型とするもので、本学の「天保癸卯 謹身往来 全」がこれにあたる。第六類は和漢混淆文・七五調美文體・散文體などの文章形體で教訓一般を説いたもの、第七類は明治初年に著述して刊行されたもの、である。D特定の特目について説いたものは「二十四孝子の説話を足場に作られた一連の手本」とされ、その他の教科書類に分類した「絵本二十四孝」「やまと孝経」などが該当する。“躰方の往来群”は「心がまえや徳目を背景において、日常生活における行動や言葉づかいのあれこれを、具体的に教示しようとした往来」とされ、さらにA児童の躰一般に関するもの、B立居振舞を中心としたもの、C手習い・学問への躰を中心としたもの、D子どもの養育に関するもの、に小分類される。さらに“知育型の往来群”は「庶民の間における生産力の向上、生活水準の向上、そしてこれを基盤とする諸文化の発展にともなって、子どもの知性を伸ばし、伸ばした知性で望ましい道徳行為・生活をいとまませようとの方針で編集された往来」である。これはさらに二つに小分類され、A子どもの知性一般の伸長をねらいとしたもの、B筆学に関するもの、であるが、「世話字往来」はA類に該当する。“四民教訓系——武家教訓を中心として——”は「階級制度を存続・強化して社会を安定させていくための共通道徳が発展していくのと同時に、武士は武士にふさわしい、庶民は庶民なりの道徳が創られ展開するに至った」もので庶民は「実業類」として、武士は「訓育類」として多くつくられたとされる⁽²⁾。

訓育類実語経型に該当する四種の書「童子往来萬福宝蔵」（享保7年3月）、「新童子往来萬福宝蔵」（文化4年）、「新童子手習鑑」（文政8年正月）、「懷宝童子往来」（天保13年）はいずれも厚手の本である。つまり「実語経」「童子教」とそれ以外の内容の合綴本であり、岡村が往来物の分類の際に、「合書類」として独立させたほどであるから、訓育類に無理に入れなくてもよいかもかもしれない。「童子往来」系統は教訓的内容のルーツを「実語教」「童子教」にもつという往来物成立の独自のルートをもっているからである。

『群書解題』⁽³⁾によれば「実語教」は「平安時代末期から明治年代初期にいたるまでの児童教科書」とされ、作者は弘法大師空海とされるが確証はないとされる。成立は平安末期と推定され、少なくとも鎌倉期には普及していたようであるが、江戸時代にはいって往来物としてさ

かに発刊され普及したとされる。「童子教」も「室町時代初期から明治年代初期にいたるまでの児童教科書」とされるもので、作者は僧侶安然とされるがこれも確証はないとされる。成立は鎌倉末期と推定され、少なくとも室町時代初期には普及していたとされる。いずれにせよ、仏教倫理と儒教倫理を庶民にわかりやすく簡潔に説いたもので、石川松太郎によれば重版・異版を合わせると170種類ほどあり、それらは手本系・読本系・注本系・絵抄系に分かれるという。また類書も多かったようである⁽⁴⁾。

「童子往来万福宝蔵」(享保7年)の内容を検討する。表紙に続いて天神经文と菅原道真像の絵、「かきならふ筆にこころをいれて見よ、よろつの多から手のうちにあり」などの歌と挿絵が5点、小野篁歌字盡、七以呂波、商売往来、庭訓往来が合綴されている。頭書付きで、頭書内容は多岐にわたり、今川状である「今川了俊愚息仲秋制詞条々」、義経状、初登山手習教訓書、熊谷送状、経盛返状、風月往来、御成敗式目である。「実語教」は五言の簡潔な文で、内容は「山高故不貴 以有樹為貴」から始まり、学文を尊敬し学んで智識あるを人の為すへき道、人倫の道を繰り返す内容で「智是万代財」「人不学無智」などの価値を教えている。全体の構成は智を永久不滅とし智は学により、学は人間のすべての行為つまり実践により成就できるとする。「童子教」の内容は、「夫貴人前居 顕露不得立」に始まる。「実語経」より長い文でやや難しい。幼童に因果の道理を教えるに儒教の格言により日常道徳を教え、父母に孝養を積めば仏神の憐憫を得て成就するという趣旨を教えている教科書である。

「新童子往来万代宝蔵」は、内容の構成は「童子往来万福宝蔵」と同様である。基本を商売往来、庭訓往来、実語経、童子教で構成している。頭書に天神教、七以呂波、今川状、義経状、初登山手習教訓書、熊谷送状、経盛返状、御成敗式目、風月往来は共通内容であり、七情画解、太刀折紙之法式、用文章、弁慶状、絵入り十千十二支などは新たに加えられたものである。

「懐童童子往来」(天保13年)は前の二書と内容及び編集形態も似通っている。厚手の書で合綴本である。士農工商之図、和漢名筆略伝之図に続いて、庭訓往来、商売往来、実語経、童子教、いろは、今川状である「今川了俊对愚息仲秋制詞条々」、初登山手習教訓書、腰越状、義経含状、弁慶状である「西塔武蔵坊弁慶最期書捨一通」、熊谷状、経盛返状、そして最後に和俗制作の字で終わる。頭書も多彩である。御成敗式目、天神教訓状、寺子教訓書、大日本国盡、小野篁歌字盡、永字八法之図、諸職往来、曾我状、同返状、木曾願書、雲上地下百官、真草偏冠盡、十二月異名、年中二十四節、五節句異名、十千十二支からなる。百科辞書的な便利な書である。

「新童子手習鑑」(文政8年)も似通った編集ではあるが頭書などに工夫がこらされている。表紙に続いて、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の絵入り説明、茶・香・鞠・花・歌の解説、花押書様、士・農・工・商の職の説明、大日本全国図、東百宦名盡、永字八法之図に続いて、実語教、童子教、商売往来、今川制詞状、小野篁歌字盡、十二月異名、相性人名字づくしなどである。実語教・童子教を基本として編集されているともいえる。頭書は改算塵劫記、八算見一、国盡、能之監觴、以呂波之監觴、七以呂波、名乗字盡、不成就日がある。頭書に算術や芸能内容を盛り込んだ事が特徴である。

「謹身往来」を取り上げる。天保14年（1843）生花堂梓・内山松陰書である。内容は「江戸の町人層を目途に、日常生活の心得を記し、要用の単語を列挙してある」⁽⁵⁾とされる。子どもが学ぶべき日常生活に必要な語彙や単語を教訓的な文脈の中で列挙しているが「商売往来」「江戸往来」にも見られる実業内容や名所旧跡、特産や物産などの語彙・単語も含まれている。学ばば家や商売の繁盛や子孫繁栄が得られるが、学ばなければ悪徳、地獄、家の破産へ墮落するという趣旨の因果関係を教訓的に人倫の道として論述しているのが特徴である。本文の前に「謹身」の軸を師匠が寺子に説明する絵図があり、頭書は仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の語義の解説がある。「抑教之有増者人々可有心得事先以四海波静注目出度御代日夜朝暮三綱五常道行国民安寧五穀豊饒之御政不淺」で始まり国民の安寧五穀豊饒は政治と人倫の道が正しく行われ「天道正直之道理」にかなっているからだとする。そして長酒や宴、遊興に耽ることや賭博などの勝負事を慎み、もし不埒不法が増長すれば天罰を被り人の批判諍りを受ける、ついに地獄餓鬼畜生修羅之呵責を受けるとする。続いて「市中之往来諸国之旅人」の訪れる江戸名所地、馬の種類、笠懸などの武芸、鳥の名前、宿駅、魚肴の名前、病の種類、衣服の類、金銀細工や彫り物、職人商人の宗旨、職人技、日常雑器、武具の名称、食物の名前、菓子の種類、呉服類、装束類、染色と染柄類、薬種類、舞楽や音曲と楽器類、官職名、普請と材木名称、番匠と棟梁の職人道具、家財道具と床飾り類などが列挙される。この部分は「商売往来」の内容と重複する部分もある。最後に「御代行聖賢之仁政、上下風俗淳美潤大徳之所致、誠所拙言不能不及腐筆者也」と締め括る。この「謹身往来」は教訓内容と実業、実学、生活に及ぶ多岐にわたる内容編集が特徴である。

「世話字往来」を検討する。まず「世話字往来」は東都書肆の藤岡屋慶次郎板で弘化期に新板となった本である。女師匠による手習い図があり本文となる。内容は人は幼少の頃から習い馴れることが大切でこれは格別むつかしいことではなく、作る形、品、行儀など正しく教えるべしとしてどのように習い教えるのが良いかを具体的に述べ、そうでないと人間が悪行に通じて行く様を具体的に展開している。小本ながら簡潔な趣旨で一貫され説得性が高い。例えば幼少の頃からどのように習うのかについて、「朝起て手水を遣、目を覚し膳に居て礼を述、喰終まで余所見せ次、采の善悪好不好嫌ひな物ハ喰ぬまで必ず言い申すまじ」など生活面の礼儀と躰を述べる。続いて「年八歳に成ならバ暫手習初べし手跡稽古の其仕様先机をバ直に置、硯の水ハ八分に墨の順運氣を付て曲ぬ様に摺—墨の色加減見定筆を染、肘を絡て□より持、手本に向ひ文字毎の大小長短広狭と片と旁と踏み冠其相応を能見分筆の運に浮沈、一を引にも打点も心を配り和に筆の勢後なく一字成共合点して手本の様に書ぬれば人に勝て手を揚る」と流暢に述べられる。そして「算盤盤を精出し士農工商面々の家業の道を第一に覚て後ハ其障に学問素読、謡、舞、鼓、小鼓、笛、太鼓、薬湯、生花、碁、双六、将棋、十胡、香、鞠、弓馬、柔術、剣術、歌、連歌、料理、俳諧、琴、胡弓、三弦、尺八、琵琶、平家小唄、浄瑠璃、楽の笛」などの芸事に嗜むとも必ず家業を疎略にしないことを厳しく戒めている。後半の内容はそうしない場合の悪しき事例が同質の重みで叙述されている。庶民の価値観に多大な影響をもった「余力学文」を簡潔に述べたものである。頭書には「諸芸修行の歌」「忠孝の歌二首」「偏冠盡」

「名頭字盡」「苗字大規」「和製文字」がある。「世話字往来」は知育型で知性一般の伸長をねらう往来とされるが始祖は「世話字往来教車」(安永五年開版)である。

(2) 女子用往来について

女子用往来として「女用婦見硯」「百人一首 女文書 和歌三神」「世界婦女往来」を取り上げる。「女用婦見硯」と「百人一首 女文書 和歌三神」は近世の手本類であり、「世界婦女往来」は明治6年発刊である。

「女用婦見硯」は大坂の松村書林上梓、長玄海堂筆である。この書は「四季折々の音信、婚礼、安産、袴着、髪置、旅立ち、見舞」などの日用の手紙文雛型が編集されている。菅原道真の母の絵図と和歌があり、頭書には「文字のはじめ」「女子文章訓」「化粧の仕やう」など12項目の解説がある。奥付には諸国発行書肆として讃岐高松、阿波徳島、淡路須本、備前岡山、備中倉敷、安芸広島、長門萩、肥後熊本、加賀金沢、越中富山、大坂心齋橋の書肆名があり、特に西国に流布しているようである。内容は女子の日用の文及び返事からなる17篇と文のみ6篇からなる。「初春祝儀文・同返事」「暑気見廻の文・同返事」「婚礼の婦見・同返事」「平産のふみ・おなじく返事」などや「帯いはひのふみ」「袴着のふみ」などである。文の文体は女用で流暢な仮名主体の文章である。「里入り文」では「明日は御里入遊し候よしいつれも様かた御歎のこといか斗と察し入まいらせ候この一種御祝儀までに進上いたしまいらせてたく申し上げ候」「同返事 御水くさ拝しまいらせ仰のことく婚礼式万事首尾よく相整けふにハこなたへ参しよろこひまいらせ候御祝儀として品々御送り下され忝存じまいらせ候おめもしにて御礼申上まいらせにてもめてたく申し上げ候」などである。石川松太郎の分類では消息型・用文章系に該当するといえよう⁽⁶⁾。

「世界婦女往来」は明治六年四月発刊、山本與助著、荻田篠夫書、浪華の書肆宝文堂の出版である。「皇后養蚕図」「世界婦女五人種の図」があり、本文となる。世界各国の女性の風俗・婚姻の現状や知識・学校・服装などもふれている。世界を文明と野蛮と半文明国と分類し、欧米列国が文明国で日本は文明開化をめざす国、アジアは「野蛮国」という図式が濃厚である。文明開化を啓蒙する書でもある。「夫文明開化乃聖時にあたりては婦人女子といへども万国の事情風俗ハ知らずんハ有るへからず、かつ女子生涯の行ひハおごそかに慎みて外国人にさらわれる事なかれ」にはじまる。そして各国の女性の紹介がなされる。まず、日本については明治以前は「仁義の道備はり婦女ハやさしく貞操を守り都て誠乃道ある国乃風なり」とし、明治維新以後は学校の設けあり、幼童に知識をひろめ、開化を奨める。「京都に於いて中学校に在りし女子数人——又東京にてハ亜米利加へ留学にまいるし少女数人有り——是全く開化進歩のときにして御維新の御いさなうを仰ぎ奉るべきなり——女の手業をはげみ——内を治むる事に心を用ふべし」とされる。次いで中国、続いて印度、東印度の島々、西藏(チベット)、比耳西亜(ペルシア)、蘇門答喇(スマトラ)、欧羅巴州(ヨーロッパ)では、英吉利(イギリス)、佛蘭西(フランス)、普魯西(プロシア)、日耳旁(ゼルマニア)、奥地利(オーストリア)、阿蘭陀(オランダ)、白耳義(ベルギー)、西班牙(イスパニア)、葡萄牙(ポルトガル)、瑞西(スイス)、

デンマーク、スウェーデン、オロシヤ各国の女性が述べられる。続いてトルコ、アフリカ州のモロッコ、エジプト、そしてアメリカ州のアメリカ合衆国とメキシコ、南アメリカ州各国、ハワイ国、オーストラリアについて述べられる。最後に再び日本に戻り、「上等国に生まれ得る身の幸ひハよろこびても猶あまりあり」としながら、「いずれの国にても其道を守り節操を正しく夫に従うへし、貞女烈婦は天の恵みをうけて諸人に敬われ親族に親しまれて生涯を安楽に終るべき事疑ひなし」として謹み努める事を奨励して結んでいる。頭書も「勅語之略」、蚕桑の業を教えた上州の女子、大阪の授産所に紡織の道を習った女子、京都女学生、米国留学女学生、実用の和英単語、五十韻、京都女職引立会社の図、改暦の大小、御布令の文字の略解など多彩で詳細である。書肆は西京、東京の各地にあり広く求められたことが伺われる。石川松太郎の分類によれば女子用往來の社会型・社会系に属し、「文明開化の社会にふさわしい新知識・新常識によって内容を構成しているところに特徴」があるとしている⁽⁷⁾。

「百人一首 女文書 和歌三神」を検討する。この書は手本所有者と思われる「柳田氏」の書き込みと共に、文政六年癸未四月中旬と書き込みがあり、幕末には使用されていた。まず絵入りで紡織の手技の語彙の解説がなされる。すなわち蚕連、蚕槌、繭釜、繭籠、南繰車、絡車、小紡車、蟠車、経架、緯車、機、布機の説明が絵入りでなされている。次いで百人一首に出ている女性歌人、伊勢・小野小町・和泉式部・小式部内侍・赤染右衛門・清少納言・紫式部・大幾三位について説明文が上段に人物像絵図が下段に描かれ一頁分があてがわれている。次に百人一首が絵入りで一頁八人ずつ、天智天皇から始まり順徳院で締めくくられる。次いで秋の七草の萩、女郎花、葛、撫子、薄、藤袴、薺（キキョウ・アサガオ）の絵入りで歌が付されている。次いで女書の手本となり達筆な平仮名書きがある。頭書には女性図と“姑につかふ堪忍”など中国の嫁や子の孝行話の説話、諸寺略縁起として和州長谷寺・興福寺・東大寺・清水寺・清凉寺・天王寺の縁起が説かれる。次いで日用文章の雛型、女中文の対様の事として文の結び方が絵で説明される。女髪のかき方、やまと言葉の語彙の説明がある。当時の女性が教養として知っておくべき知識や日用の知識を内容としていた。吉海直人「女子用往來物としての百人一首」⁽⁸⁾によれば「一応の目安として、ここでは出版点数として千種類以上という数字を提示しておきたい」⁽⁹⁾とあるように、吉海直人による979点凡そ1000種類以上は少なくとも確認されている数である。石川松太郎によると女子用往來物は1000～1500種類と既に予測されていることと合わせると、膨大な発刊ということになる。百人一首の出版状況からみると元禄頃までは「かなりな知識人（男）を対象とした比較的分量の多い百人一首注釈書（例えば『幽齋抄』『改観抄』等）の刊行の方が主流だった。ところが享保頃から——百人一首の簡素化が行われ、同時に絵本仕立て（ビジュアル版）になったことにより、百人一首の出版数が徐々に増加しはじめ——宝暦・明和頃になると、まさに爆発的に増加しはじめている」⁽¹⁰⁾とされ、この時期を女子用往來物としての百人一首の確立期とみている。女子用往來物のなかで百人一首は他の内容と合綴本になっていることが多いことも特徴であるが、形態からみると吉海論文によるとA百人一首本文のみ（古活字本等）、B作者絵入り百人一首（素庵本等）、C頭書付百人一首、に類型化されているが、本学所蔵本のような頭書付で作者絵入り本は近世になって一般に普及し

ていた形態といえよう。そして天野晴子「女子用往来物の刊行に関する一考察」によれば「女子用往来物は、本文が教訓であったり、手紙文例であったり、あるいは百人一首その他様々であるにせよ、いずれもその形態・内容に庶民化の様相を伴いながら、普及と共に継承されていく。それは単に本文の内容や習字手本としての学習だけでなく、生活のさまざまな場面に関する情報を満載し、またそれによって一層の普及を遂げた側面を持っていたと考えられる」⁽¹¹⁾とあるように、江戸時代の女子の識字の進展による需要の増大に対応して巧みに百人一首を庶民化した出版状況があった。

(3) 古往来について

本学所蔵の古往来は「庭訓往来」「首書読法 庭訓往来具注鈔」の2点である。古往来については石川謙『古往来についての研究—上世・中世についての初等教科書の発達—』⁽¹²⁾があり、目録と解題については石川松太郎『往来物分類目録並に解題 第一集 —古往来 [一]』及び同『往来物分類目録並解題 第二集 —古往来 [二]』がある。また庭訓往来については石川謙『庭訓往来についての研究—教科書の取扱方からみた学習方法の発達』⁽¹⁴⁾がある。教育史分野においては往来物研究の嚆矢であり基礎となっている。

「庭訓往来」から検討する。「御家 庭訓往来」とあるように手習手本として作成されている。一面は五行、一行九字で大きな文字で書かれている。書は芝泉堂、東都書林である芝神明前の泉栄堂、和泉屋吉兵衛の梓による。頭書や絵、解説はない。文の始まりは「春始御悦向貴方先祝申候畢富貴満福猶以幸甚々々」の定型文であり、百七丁の厚手の本である。内容は正月から十二月まで各月ごとに二通の書から組み立てられ、日付と宛て名、差出人が書かれている。正月は五日付け左衛門尉藤原から石見守へと六日石見守中原より源左衛門尉宛、二月は二十三日弾正忠三善より大監物へと二十三日監物丞源から弾正忠宛、三月は七日玄蕃允平より御政所へと十三日左衛門尉橋より玄蕃允宛、卯月は五日前采女正より中務丞へと、十一日中務丞清原より采女宛、五月は九日左京進平より蔵人将監へと、五月日大夫将監大江より左京進宛、六月は七日勘解由次官小野より後藤兵部丞へと、十一日兵部丞丹治より勘解由次官宛である。更に七月は五日左衛門尉大中臣より宮内少輔へと、七月日紀より大蔵丞宛と三十日加賀大縁和気より民部大輔宛、八月は七日藤位長谷部より大縁宛と十三日左衛門尉より大内記宛、九月十二日沙弥より侍者御中宛と九月日侍者より平入道宛、十月は三日沙弥より衣鉢侍者禅師宛と十月日某より主計頭宛、十一月は磯辺某より宮内宛、十二月は隼人佐より越前守宛と同じく三日越前守磯辺より隼人佐宛の書状から構成されている。内容は多岐にわたり、やや難解である。海産物や魚鳥の名前、柱立や建築用語、諸国の名産物、また訴訟や法律、芸事、武具や武芸、衣服、参詣、仏事、病気や医療、官職に関する内容など簡潔な叙述である。巻末に文政戊子年（文政11年 1828年）門人の荒川賜湊による書の師、芝泉堂についての人物評がなされている。この書の発刊も文政11年以後である。

「首書読法 庭訓往来具注鈔 全」は庭訓往来の注釈本である。新板は天保5年（1834年）12月であり、再刻は弘化3年（1846年）、三刻は嘉永7年（1854年）であり、書は浪速の部関牛、

京都と摂津の五書堂の合梓による。五書肆とは京都の吉野屋仁兵衛、山城屋佐兵衛、升屋勘兵衛の書肆であり、大阪の河内屋喜兵衛、河内屋太助の書肆である。それに嘉永7年の三刻の折りには尾張の永楽屋東四郎が加わっている⁽¹⁵⁾。題言によれば「児童独学の便りならしめん」ために「具注鈔」と名付けたとある。編集構成は本文の訳文が仮名付で頭書に掲載され「童蒙の誦読遺忘に備えんとす」とされる。全文が文章の区切りごとに注解が施されている。注解によれば「庭訓往来」について「庭訓の義の起ハ論語季氏篇に孔子庭に立ち給へる前を御子伯魚が過ぎられし時、汝詩礼を学びたりや人として詩礼を学ばずんバ以ていふことなく立つことなかれと示し給ひしことあり、此故事に原きて童蒙に物を教ゆるを庭訓とハいふなり、歌にもたらちねのハのをしへと読めり。往来ハ贈答の義にして進状返状を指せるなり」とある。注解は懇切丁寧で子どもの独学で理解できる内容に工夫されている。87丁の書である。石川松太郎によれば庭訓往來型は「南北朝時代より室町初期にかけて（十四世紀中頃—後半）、武家や上層庶民の子弟が、家庭や寺院において、文字を手習い学問を修める風が一般化してくると、かれらを目途に編まれた往来が出現した。その代表的なものの一つが『庭訓往来』である」⁽¹⁶⁾とされる。作者は玄恵とされるが確証はないとされている。内容は二十五通の手紙文の構成で手紙文・単語集団・手紙文・差出人の名前と日付及び宛て名の編成を基本としているとする。「十二月往来」にみられた月々の模範的な手紙の往返二通ずつと「八月十三日状」一通からなり、主意や題材は多種多彩であるが、特に最も語彙数の多い部門は石川によれば衣食住で370語彙、次いで職分職業部門で217語彙、三番目に仏教部門で179語彙であり、最も少なかったのは文学部門の16語彙であるとしている⁽¹⁷⁾。要するに「『庭訓』は平安・鎌倉時代より南北朝時代にかけての教育遺産をたぶんに継承してはいるものの、室町・江戸時代にむかって前進する新しい教育観への第一歩」の書であり「当時としては新鮮な手本」とされる。これも「庶民勢力の抬頭と近世的経済体制への指向」という社会動向に対応した「教育分野の内壁におこりかかった生活本位・実用本位の教育観を具現したのが『庭訓往来』であった」⁽¹⁸⁾という。この庭訓往來系統は江戸時代には手本系・読本系・注本系・絵抄本系の四系統に分化して発展していく。元禄ころまでと天明期以後にさかんに流布し、近世の庶民用に改変して普及していったと分析されている⁽¹⁹⁾。『群書解題』においても「室町時代初期の教科書」で作者・成立年代ともに異論多く、作者玄恵説は江戸時代に広くそのように考えられたものであるが「定説をみない」とされる。また成立年代も室町後期とする石川謙説、南北朝時代とする松井簡治説、南北朝末期から室町初期とする高橋俊乗説、応永15（1408）年を上限に応永28（1421）年を下限とする平泉澄説など多岐にわかれるとする。内容は「武家生活を基礎とした」もので「この種のもののうち、最もすぐれた著作であり、流布も広範であった」と評価している⁽²⁰⁾。

(4) 理学類及びその他の教科書について

理学類として「新版改算塵劫記 全」1点、教訓的内容から訓育類ともいえるが儒学書類とあわせてその他の教科書として「絵本二十四孝」「教訓古今道しるべ」「大和孝経」（一、二、三、四、五）の3点を取りあげる。

「新版改算塵劫記 全」は10丁の小本で大坂書林伊丹屋善兵衛板である⁽²¹⁾。内容は二之段、三之段、四之段、五之段、六之段、七之段、八之段、九之段についての和算と算盤への数のおき方の図が示されている。そして「第三 見一并割こえ」として見一無改作九一・納一倍一、見一之段、同掛算、見二之段、見三之段、見四之段、見五之段、見六之段、見七之段、見八之段、見九之段について説明と算盤図がある。次いで「第二 八算并割こえ」表がある。石川松太郎によれば理学類として大別して天文暦学・地学関係、生物・生理関係、窮理（物理学）関係、算数型の四種類にわけられるが、塵劫記類は算数型に分類される。「塵劫記」は寛永年間に吉田光由により著わされたもので、内容の特徴は「生活に採った題材の豊かさと数学的に初歩の問題に限定している」⁽²²⁾ことにあり、「江戸時代より明治の初年にかけて、編集の方式や内容に多くの改定ないし増減を施されながら、おびただしい版を重ねて普及した」⁽²³⁾とされる。また川本亨二「初等算数教科書としての『塵劫記』」⁽²³⁾によれば、吉田光由は毛利重能に師事し、角倉素庵に「算法統宗」（程大位著、1592年、ソロバンの算法を説いた中国の算書）を学び、「塵劫記」の初版を寛永4年（1627年）に四巻本として発刊している。この寛永本も数種あり、中国の伝統的に数学書の体系により配列が考えられた教養書として発刊された。しかし現実の経済生活に合わせることにより改良が加えられ、内容が整理され、より完全なものに近づけるために努力が頭注をつける形で行われ原型は崩されなかった。しかし元禄頃より「塵劫記」と「改算記」を必要な部分を取り出して再編され、「塵劫記」の原型が解体されていく。さらに庶民のなかにソロバンが普及するにつれて八算（除数が一桁の割り算）見一（除数二桁以上の割り算）と相場割だけの簡略化された小冊子が普及したり、読み書き手本と合冊して編集され普及するなど出版業の営業策に影響される。寛政期以後の簡略化した初等算数教科書は加減算が欠落していることが近世の教科書の特徴とされるが、加減算は家庭や奉公先で直接手ほどきを受けて修得し、乗除法を寺子屋などで専門家の手ほどきを受ける必要があったとしている。

次いで「絵本二十四孝」をとりあげる。37丁で絵入りの二十四孝の物語りの本である。石川松太郎の分類によれば、二十四孝は訓育類に属し、さらに「一般教訓型の往来群」のうちの「特定の特目について説いたもの」であり、流布した数も多かった往来として位置付けられている。二十四孝とは中国古代で孝行者とされる二十四人が選ばれて説話が集録された教訓書である。元代に成立し、撰者は郭居敬とされるが確証はないとされている。日本においては「南北朝時代にすでに移入され、以後、室町時代を通じて五山文学に摂取されるなど広く読まれていた。わけても同時代の末、和訳されて『お伽草子』とされるにおよび、読者層が著しく拡大したのである。」⁽²⁵⁾とされる。特に江戸中期から明治初年にかけて日本の孝子譚を二十四孝として編纂されたものもあるという。「絵入り二十四孝」であるので一孝子話ごとに絵が挿入されている。取り上げられた孝子24人は虞の舜、漢の文帝、周の曹子、周の閔子、周の仲由、漢の董永、周の割子、後漢の江革、後漢の陸績、唐の崔山南、晋の呉猛、晋の王祥、漢の郭巨、晋の揚香、宗の朱寿昌、南齊の萸黔疏縷、周の老萊子、漢の葵順、後漢の黄香、漢の姜詩、魏の王褒、漢の丁蘭、晋の猛宗、宋の黄送である。最後に説話を事例として孝について論じられている。

「教訓古今道志るべ」は天保8年発刊の74丁の本である。表紙見返しには中備倉子城、蝠翔

齊小野弘度編輯「教訓古今道志るべ」とあり、奥付には備中阿知郡倉敷の小野治右衛門、蝠翔齊弘度蔵版とある。裏表紙の見返しには「持主 岡本金右衛門（花押）、持主 岡本庸衛」の書き込みがある。この書は吉備倉敷の小野弘度が生業のために、吉備の国内を彼方此方とするうちに、人の教えとなるべき仮名文あるいは童蒙の耳に母がやさしく諭す歌など、他国の人の話を聞き書き集めたものを纏め発刊したものであるとされる。「水戸黄門光圀卿広間へ以御自筆、被為掛候御条目」や、孝行について絵入りの説話、「手嶋先生のいろはうた」など仮名入り文章で、わかりやすい文が集められている。また「天満宮御歌」など和歌も挿入されている。母親が読んで楽しみ、子どもに語り聞かせるための本といえる。

「大和孝経」は巻之一から巻之五までの合綴本である。合綴されて120丁であり、末尾には「無年号なれども本書末文によりて寛文二年」の付箋がついている。巻之一には「孔子の傳、曹子の傳」など7項目、巻之二には「周公乃御子伯禽へ御志めしの事」など10項目、巻之三には「周乃令王風を横目にする事 付清盛童の事」など11項目、巻之四には「曹子最後のことばの事」など13項目、巻之五には「夏の禹王洪水をおさめ給ふ事」など21項目について孝についての話が説かれている。絵入りである。

おわりに

本学所蔵の往来物48点のうち、本稿では訓育類（教訓類2点、合書類6点）6点、女子用往来物と女子用教科書類3点、古往来2点、その他の教科書類4点、合わせて15点について述べてきた。本稿をもって「本学所蔵の往来物の研究」（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）と連続して論じてきた本学所蔵の往来物48点の分類と形態や内容の特徴などについての分析を完結する。往来物とは日本の平安末期から明治・大正・昭和から現代に至るまで存在しつづけているが、とりわけ庶民の読み本として、子どもの学習教科書として活用され、めざましく普及したのは江戸時代である。庶民の生業と知識欲と娯楽を充足させるにふさわしい創造力や工夫力、彫りや刷りなどの印刷技術の高さや色彩感覚の繊細さなど、予想を越えて洗練されたものが多かった。また幕末にこの往来物の発刊が7000種、その内、女子用往来物は1000～1500種に及んでいたことも驚異的であり、庶民の生活力と知識欲、創造力のたくましさ、奥深さに改めて感慨を深くした。

（注）

- (1) 石川松太郎『往来物の成立と展開』56頁 「三 訓育類」参照
- (2) 前掲書56～79頁参照
- (3) 続群書類従完成会編『群書解題』第8巻雑部 1961年4月28日初版発行、1976年11月30日再版発行。340頁上段6行目から341頁上段11行目まで参照
- (4) 前掲石川松太郎『往来物の成立と展開』58頁5～10行目参照
- (5) 前掲書64～65頁
- (6) 前掲書196頁12～18行目～197頁1～9行目参照
- (7) 前掲書199頁5～6行目参照

- (8) 吉海直人「女子用往来としての百人一首」は江森一郎監修『江戸時代 女性生活研究』1994年6月21日発刊、江森一郎監修『江戸時代 女性生活絵図大事典』別巻所収論文。
- (9) 前掲『江戸時代 女性生活研究』117頁下段後6～5行目参照
- (10) 吉海直人前掲論文118頁下段後4行～1行目、119頁上段1～8行目参照、湯沢賢之助「近世出版目録にみる『百人一首』」(跡見学園短大図書館蔵百人一首目録稿四・1988年3月刊行)も参照された吉海氏の論述である。
- (11) 天野晴子「女子用往来物の刊行に関する一考察」は前掲江森一郎監修『江戸時代女性生活研究』所収論文 4頁下段13行目～18行目参照
- (12) 石川謙『古往来についての研究—上世・中世についての初等教科書の発達—』1949年8月31日発刊(講談社)本文が455頁の大著である。
- (13) 石川謙の子息である石川松太郎により石川家(謙堂文庫)所蔵の古往来の目録と解題が付されている。謙堂文庫 石川松太郎『往来物分類目録並に解題 第一集—古往来[一]—』1986年10月1日発刊、同『往来物分類目録並に解題 第二集—古往来[二]—』1992年12月10日発刊。両書とも印刷は東京法令出版。
- (14) 石川謙『庭訓往来についての研究—教科書の取扱方から見た学習方法の発達—』1950年5月5日発刊 この著書は日本学士院賞を受賞した論文で、東京教育大学教育学会が受賞記念として編集発行したものである。印刷は金子書房。内容は第一篇が庭訓往来についての研究、第二篇は庭訓往来分類目録、付録、庭訓往来旧鈔(原本復刻)からなる。
- (15) 京都の三書肆の場所は、それぞれ吉野屋仁兵衛は京都三条通御幸町、山城屋佐兵衛は寺町通五條上、升屋勤兵衛は富小路三条上ル、である。大坂の二書肆の場所は河内屋喜兵衛は心斎橋通北久太良町、河内屋太助は心斎橋通唐物町にあった。後発の尾張の永楽屋東四郎は名古屋本町七丁目にあった。
- (16) 前掲書、石川松太郎『往来物の成立と展開』8頁12-14行目
- (17) 前掲書、石川松太郎『往来物の成立と展開』11頁
- (18) 前掲書、12頁から13頁4行目まで参照。
- (19) 前掲書、14頁から15頁参照。
- (20) 群書類従完成会編『群書解題 第2巻 消息部・文筆部・伝部』1961年11月15日初版、1976年5月30日再版、24-26頁
- (21) 大坂書林伊丹屋善兵衛の場所は南久宝寺町心斎橋北へ入、である。
- (22) 前掲書、石川松太郎『往来物の成立と展開』189頁1～2行目
- (23) 前掲書、14～15行目参照。
- (24) 川本亨三「初等教科書としての『塵劫記』」『教育学研究』第35巻第2号 1968年6月発刊、理学類及び塵劫記について、前記論文のほかに川本氏による『日本教科書大系 往来物編第14巻 理数』所載の「解題・解説」参照。
- (25) 前掲書、石川松太郎『往来物の成立と展開』67頁7～9行目参照。

表1 本学所蔵往来物の概要

番号	書名	作者	出版年	寸法 (センチ)	一行行数 一行字数	題 篇	丁数	出版元	発行書林	備考
1	文林秘宝大成 童子往来万福宝蔵		享宝7年 3月	たて26.5 よこ18.5	実語教 8行・10字 童子教 8行・10字	有	119	浪華書林 大黒屋喜左 衛門 敦賀屋九兵 衛 鳥飼市兵衛		
2	新文化 童子往来万福宝蔵		文化4年	たて25.5 よこ18.5	実語教 8行・10字 童子教 8行・10字	有	96	江戸書林 須原屋伊八 敦賀屋九兵 衛 大阪書林 播磨屋利助 秋田屋太右衛門 塩屋平助		
3	頭書絵入 新童子手習鑑	木村明啓編 暁鐘成(画) 和田正兵衛 (書)	文政8年 正月	たて21.8 よこ15.3	実語教 7行・10字 童子教 7行・10字	有	52	東都 文好堂	鈴屋安兵衛 松屋喜兵衛 永楽屋平四郎 鶴屋善右衛門 山城屋佐兵衛	
4	頭書絵入 懐宝童子往来		天保13年	たて17.4 よこ12.0	実語教 6行・10字 童子教 6行・10字	有	153	江戸書林 須原屋茂兵 衛 大阪書林 秋田屋太右 衛門		山下文庫印あり
5	天保癸卯 謹身往来 全	内山松陰書	天保14年	たて23.0 よこ16.3	一面5行 一行8字	有	32	生花堂		
6	世話字往来		弘化年	たて17.7 よこ11.5	一面5行 一行9字	有	11	東都書肆 藤岡屋慶次 郎		女師匠・寺子 の絵あり
7	世界婦見視 全			たて22.0 よこ15.2	一面5行 一行6字	無	48	敦賀屋九兵 衛 棋津書林 松村	諸国13書林	
8	世界婦女往来	山本興助著 荻田筱夫画	明治6年 4月官許 明治6年 8月発行	たて17.7 よこ12.0	一面5行 一行7字	有	49	宝文堂 大野木市兵衛 版	諸国109書肆	
9	百人一首 女文書 和歌三神			たて24.7 よこ18.0		無	50			原蔵者 赤井達郎氏 表紙うらに 「文政六年癸 未四月中旬柳 田氏」かき込 みあり
10	庭訓往来			たて23.5 よこ18.0	一面5行 一行10字	有	107	東都書林、 昌栄堂、 和泉屋吉兵 衛		
11	首書読法 庭訓往来具注 抄	蔀岡牛	嘉永7年	たて25.0 よこ17.8		有	87	京撰書肆 五書堂合梓	尾張・京都・ 大阪 六書肆	天保5年新版 弘化3年再刻 嘉永7年三刻
12	絵本二十四孝			たて27.7 よこ19.0		無	37			
13	やまと孝経			たて26.6 よこ17.1		有	120			(一)～(五)ま での合綴本
14	教訓古今道し るべ		天保8年	たて22.5 よこ15.5		無	74	小野治右衛 門 嚙翔齋弘度		(持主) 岡本金右衛門 岡本庸衛のか き込みあり
15	改算塵劫記			たて21.3 よこ15.0	一面11行	有	10	大坂書林 伊丹屋善兵 衛		

奈良教育大学図書館・教育資料館蔵